
例えば、こんな転生があったらどうだろうか？

ラモン

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

例えば、こんな転生があったらどうだろうか？

【Nコード】

N4444T

【作者名】

ラモン

【あらすじ】

どこにでもいる一般的なオタクの田中太郎。

彼はテンプレ展開で、神のミスで死んでしまった。

ただし、その神はテンプレとは少し変わっていて……。

(前書き)

はじめに

本作品は『オリジナル』です。

原作名に書いてある『リリカルなのは』と『バイオハザード』ですが、この物語中では作品と一部の登場人物の名前しか出てきません。原作って書いてあるのに何だそれ！？ と思われるかもしれませんが、一応名前を使う以上は原作と言えるかと思い、原作名に追加しておきました。

その神は、神ではあったが余りにも力が弱かった。

もし、神の中でランキングがあったとするなら、ギリギリ最下位を脱出できるかどうか分からない。

そんな程度の、まさに「神様（笑）」と呼ばれても仕方ない存在だったのだ。

さらに言うなら、その神はあまりに無能であった。

自分が管理する世界で、間違っつてひとつの国を滅ぼす事も珍しくなく、生きている人間の寿命を間違えて殺してしまう事など日常茶飯事。

しかも、殺してしまったせいで崩れた生と死のバランスを取る為に、出産する予定のない個体に無理な出産をさせて、後にそれが原因でさらに多くの生命を死に至らしめたりもした。

普通なら、こうなった時点で自分の愚かさを悟っていただろう。

しかし、この神はあまりに無知だった。

だから結果がどうなるかと予測もせずに、ただひたすらにその場しのぎ。もちろん本人は100%の善意なのだが、な対応ばかりをして、結果が悲惨な事になっては「どうしてだろう?」と首を傾げながら、また同じ対応を繰り返し繰り返し……そんな事を延々と続けている。

さらに悪い事に、この神はずっと孤独だった。

故に、犯した失態を咎める者もおらず、自分がどれだけ非道な事をしてしまっているのかを、管理している世界が生まれてから今に至るまで、ずっと理解出来ずにいたのだ。

目の前で土下座する少女を見下ろして、彼 10代後半の少年が怒鳴り声を上げた。

少年の名前は『田中 太郎』。

とある有名進学校に通っている高校3年生、趣味はアニメ鑑賞という、所謂オタクと呼ばれる人種だ。

そのせい という訳でもないが、友達自体はさして多くない。

とまあ、そんな田中の紹介はさておき。現状の説明をしよう。

「ほ、本当にすみませんでしたっ！」

泣きそうな顔で頭を下げ、そう言っているのは先に述べた無能な神。

少女の姿をしているのは、この神が自分が失敗した時になるべく穏便に済ます為に身に着けた、処世術のひとつ。小さな女の子の姿で必死に謝れば、大概の場合はあまり怒られることは無い。

余程良識の無い人間で無い限り、自分よりも弱い存在に怒り続けるという事は出来ないからだ。

「くっそ……なんだよ畜生！ 俺はアンタの手違いで殺されたってのか！？」

マジでふざけんなよっ！ 手違いってなんだ手違いって！！」

今の田中の言葉通り、彼はこの神の手違いによって“ たった今死

亡”したばかり。

本来なら魂はしかるべき場所に送られるのだが、田中の場合は神の手違いということ、こうして彼女直々に彼の魂の処遇について話に来ている という訳になる。

「す、すみませんっ！ すみませんっ！ えとあの、私が貴方の寿命を見間違えちゃって……それで、本来なら貴方はあと70年は生きられる筈だったんですが、こうして死んじゃったワケなんです」

「よし死刑だ」

「ひいっ！？ や、やめてください！」

「うっせー！ こっちは殺されてんだ！ そのくらい当然の権利だろうがっ！」

「ひいっ！！ ゆ、許してくださいっ！ 許してくださいっ！

泣きそうな顔で謝る神を見て哀れにでも思ったのか、田中は一度気持ちを落ち着けた。

少女相手に怒り続けるというのも、流石に大人気ないと思ったのだろう。

「 はあ、まあいいか。あんま怒っても仕方ないし……。それじゃあとまあええ、さっさと元の世界に帰してくれよ。出来るだろ？」

「あー……えっと、それがそのー……」

「は？ おいおい、まさか」

自分の質問に気まずそうな顔をして目を逸らした少女を見て、田中は再び気持ちをざわつかせて少女に詰め寄った。

すると、少女は「実は……」と苦笑しながら田中を見上げ、こう言うのだ。

「貴方はもう、あっちの世界には戻れません。因果が終わっちゃいましたから」

「はああああっ!?!」

「あわわっ! ご、ごめんなさいっ! ごめんなさいっ!

で、でもでもっ、これって一応ちゃんとした決まりなんで、私ではどうしようも出来ないんです!

「ごめんなさいっ! ごめんなさいっ!」

驚愕の事実を告げられて再び怒鳴り声を上げた田中に、少女はひたすら頭を下げ続ける。

田中が思わず少女の襟首を掴み上げようとした瞬間、少女が顔を上げて「ですから!」と続けた。

「お詫びに、貴方を別の世界に転生させますですっ!」

「転生？ 転生ってーとアレか？ 違う世界で、赤ん坊になってオギャーって……」

「そうですっ！ 博学ですね、田中太郎さんっ！」

「フルネームで呼ぶな。殴るぞ」

「ご、ごめんなさいっ！ ごめんなさいっ！」

再び謝り始めた彼女を無視して、田中は一人思考した。

（オイオイ、これって良く考えたら転生小説とかのテンプレじゃん！？

っーことはアレか！ これで俺も転生最強オリ主の仲間入り！？
よっしゃあああっ！！）

オタクである田中は、そういう小説を特に好んで読んでいた。いつか自分もと、そんな妄想をした事だっつて1度や2度ではない。そして今自分の目の前に、夢見ていたシチュエーションが偶然とはいえ転がってきたのだ。喜ばない方が嘘というものだろう。

「よし、じゃあ許してやつから転生させてくれ！ あ、それとFateの無限の剣製と、あとNARUTOの写輪眼とか、色々能力つけてくれよな！ もちろんデメリットは無しで！」

「え？ 無理ですよ？」

「……………は？」

興奮気味にテンプレ通りの台詞を並べ、不思議そうな顔をする少女に却下される田中。

呆然とする田中を見上げながら、少女は言い辛そうに目を逸らす。

「実は私って、そんなに力が強く無いんです。

だからその 転生をする時は、こちらから出す2つの条件のどちらかを選んでもらう形になるんですよ……だ、駄目な神様ですみません」

「ってことは何か？ 俺からの注文は一切受け付けないってことか！？」

「いえ！ もし私の出した2つの条件のうち、どちらも気に入らなかった場合は、選択肢をひとつ増やす事が出来ます！ ……もちろん、私の力で実現可能な範囲で、ですけど。

私の出来る範囲でなら、貴方のお力になりますからっ！」

「……………殴っていい？」

「はうっ！？ 殴られるのは嫌ですけど、私としてもコレが精一杯なんですっ！！」

私達の力を超える願いを叶えても、結局叶わないか、歪な形になっちゃって、逆に貴方が危なくなっちゃうんですよっ！！」

「ちっ……………」

涙ながらに訴える少女に、田中は舌打ちをしてから彼女に続きを促す。

自分の思惑とは違ったけれど、向こうの条件を聞いてから恫喝交渉するのも悪くは無い。

まあ、田中は特に鍛えているワケでもないひよろつとした身体つきなので、恫喝したところで本来なら一笑に付される程度なだけけれど、少女からすれば十分に恐ろしいのだ。

「じゃあ、とりあえず条件を出せ。それから考える」

「は、はいです。えと、それではまず一つ目の条件から。」

一つ目は、『特に能力はないけど、平穩無事に過ごせる』というものです。

言葉の通り特別な能力は全くありませんが、事件に巻き込まれずに人生を過ごせますよ。

二つ目は、『その世界で最強の力と一番カッコイイ人間になる』です。

こっちは「

」二つ目で頼む」

少女の説明を遮り、田中は即答した。

彼が求めているのは“最強オリ主”に自分なる事なのだ。

平凡な人生など、何故望むというのか。

「はわっ!?!? せ、説明を聞かなくてもいいんですか!?!?
こっちは結構色々と不具合があります」

「いいからやれ。ぶん殴られなくなけりやな」

「あうう……わ、わかりましたあ……」

手を握って見せ付ける田中に怯えながら、少女は頷いて田中に手をかざす。

すると、少しの間を置いてから彼の体が微かに輝きだした。そして、その光と共に田中の身体は足元から少しずつ消えていく。

「では、よい人生を」

「おうよ! あ、転生先は『リリカルなのは』で頼むな!」

「え? それは」

少女の言葉が最後まで紡がれる前に、田中の身体は消え去った。
そして、田中太郎の、第二の人生が始まった。

「ふっざけんじゃねえよっ!!」

「はっうっ! だ、だから私は」

「うっせえ!」

「いっごめんなさいっ! いっごめんなさいっ!」

数時間後。

田中は再び少女の前に居た。

「生まれた瞬間に敵に殺されるとか、舐めてんのかゴルアツ!?
ああ!？」

そう。

田中太郎の第二の人生は、始まった瞬間に終わりを告げたのだ。
彼が転生した先は『バイオハザード』の世界。

そこでは彼の母親は既にゾンビに殺され、何かの弾みで生まれた
彼も、生まれた瞬間に街を徘徊するゾンビに食い殺されてしまった。
享年0歳。むしろ享年数十秒、と言った方がいいかも知れない。
いくら最強の力があつたとしても、生まれたての赤ん坊では力を
行使する事も出来ない。

まさに、生まれた場所が悪かった……というものだ。

「だ、だって仕方ないんですよ！ 最強の力と一番の美形、という設定を付加させると、それだけで私の力の限界量になってしまつて、転生先の世界はどうしてもランダムになつちゃうんです。

ですから、今回は本当に貴方の運が無かつたとしたら……」

「使えねえ……」

「すみません……で、ですが、これも私のミスですから、また貴方を転生させてあげます！」

また二つ条件を出しますから、そこから選んで

「ちょっと待て」

少女の言葉を遮り、田中が口を開く。

「たしか、条件を追加出来るって言つてたよな？」

「あ、はい。確かに言いました」

「転生先を選べるようにすると、どこまで設定が付加できる？」

「え？ えーとですねえ……」

田中の質問を受けて、少女はどこから取り出した小さなメモ帳

をめくる。

そしてそのまま暫くメモ帳を眺めてから、田中の事を下から覗くように見上げて告げた。

「そこそこに強い力か、そこそこの美形か……です」

「また微妙な……」

「す、すみませんっ！ すみませんっ！」

「ああもう、いちいち謝んなよ鬱陶しい。それじゃあ、選択肢の追加だ。」

『そこそこに強い力を持って、自分の望んだ世界へ』」

強い力が無くては活躍する事も出来ない。

活躍さえ出来れば、多少顔が悪くてもハーレムは作れるだろう。数々のそういった小説を読んできた田中は、そう結論付けた。

「わかりました。じゃあ、転生する世界を選んでくださいです」

「そーだなあ……うん、やっぱ『リリカルなのは』だな。」

力を使って活躍できて、その上死ぬ心配も殆どないし……うん、これでいい」

「了解しましたです」

彼の言葉に頷きながら、再び少女が田中に向かって手をかざし、それに呼応して田中の体が輝きを帯びて少しずつ消えていく。

「では、今度こそ良い人生を」

「おう！」

そして、田中太郎の第三の人生が始まった。

「だからマジでぶざけんなよお前はさああああああっ！！！」

「ひいっ！？」

田中が転生してから数十年後。

彼は三度少女の前に戻ってきていた。

「どどど、どつしたのです！？　なんでここに！？」

「うるせえ！ 何か知らんが来れたんだよ！ つーかそんな事よりお前、マジふざけんな！」

「な、なんでしようか！？ 私は貴方に望んだ通り、『リリカルなのは』の世界に転生させましたよ！？」

「ちゃんと『そこそこに強い力』も付加させましたし！」

「確かに『リリカルなのは』の世界だったよ！」

「けどなあ！ 本編が始まる数千年前の古代ベルカに転生とかふざけんなマジで！」

「ふっつーに知ってるキャラ居なくて泣きそうな人生だったわ！！」

「はうあつ！？ そ、そうだったのですか！？」

激昂する田中の怒鳴り声に、少女は意外だったとばかりに驚いた顔をする。

「世界の指定しかされていませんでしたから、時間はランダムだとばかり……」

「んな訳ないだろおが！ 『リリカルなのは』って言ったら、普通は無印開始の少し前 なのはちゃん達と同じ年になるように転生させるのが常識だろうっての……！」

「は、はあ……ですが、生まれる時期まで指定となりますと、さらに選択肢を追加しないと……」

「何でだよ！？ その程度サービスでもいいだろうが！」

「で、ですから！ サービスでやれる程、私の力の限界量は高くないんですってばあ。」

世界と時期の指定をした上で、ちゃんと能力付加とかをしないと、また不具合がですね……」

怯える少女に毒気を抜かれたのか、田中は溜息を吐いて頭を振った。

「……分かった。じゃあ質問なんだが、転生する世界と時期を指定すると、力とかはどの程度まで選べるようになるんだ？」

「そうですねえ……えーと……」

質問に手帳を取り出して小さく唸る少女。

そうして暫く手帳を眺めた後、少女は「わかりました！」と顔を上げた。

「世界と時期を指定した場合、力は『普通よりちょっと強い』、外見なんかも同じく『普通よりはちょっといい』ぐらいのどちらかを選ぶ事が出来ます！」

「……やっぱりどっちなのか」

「す、すみません、大したことが出来なくて」

田中の諦めたような声を聞いて、少女は居心地が悪そうに縮こまって咳く。

しかし田中は彼女になど構わず、腕を組んで思考の海に沈んだ。

（今度は大丈夫だろうな……時期は指定できるし、世界も指定できる。

あとは顔か力かだけ……まあ、この場合は力でいいだろ。いちおう、前回は力を選んだけど、そんなに酷い不細工って訳じゃないし……微妙な強さでも、やっぱ接点がないと好感度も稼げないしな。

生まれる場所は……大丈夫か。最悪、9歳になった時点で家出でもすればいいしな。
よし、じゃあ世界と時期を設定して、『普通よりちょっと強い力』を選ぶので決定だ！）

前回の反省を踏まえ 前々回は殆ど意味の無いものだったので
考えない て、田中は自分の中でそう結論付けた。

「じゃあ、選択肢は」

そうして、田中太郎の第四の人生が始まったのだった。
だが、その結末は。

「……ホント、いい加減にしてくれ……………」

「すみませんっ！ すみませんっ！」

必死に頭を下げる少女。

4度目になる彼女の前で、田中は頭を抱えていた。

「まさか、管理外世界に生まれるとか……………」

そう。今度の田中は、確かに『リリカルなのは』の世界、そして『無印が始まる9年ほど前』に生まれる事が出来た。

ただし、ここで田中は自分の考えが甘かった事を思い知らされた。

『リリカルなのは』という作品に登場する、『管理外世界』。

この作品のメインである『魔法』が全く存在せず、主人公である『高町なのは』たちとの接点がゼロと言ってもいい世界だ。一応、この作品の中では地球もそうなのだが、田中が転生したのは地球ではなく、聞いた事も無いような星だった。

彼は9歳になれば家出して、地球　つまり原作キャラクターの居る星へ旅立とうと考えていた。

ただ、そこが彼の考えが甘いところだったのだ。

管理外世界というのは、そこにいる誰もが魔法の存在を知らない。さらに言えば、自分達が住んでいる以外にも沢山の世界があるなど、知るはずも無い。

つまり、世界を移動する為の装置も存在し得ないのだ。

田中に単独で世界の間を行き来する程の力があれば話は違ったのだろうが、生憎彼が得た力は『普通よりもちよつと強いだけの力』でしかなかった。

そんな高等なことなぞ、出来る訳も無い。

だから田中は、まず周囲に『魔法』を認めさせるところから始めようとした。

しかし、今まででありもしなかった現象を、9歳の子供の言葉で信じようとすると馬鹿が居るだろうか？

……居るワケが無いのだ。

一生懸命に魔法の存在を説いた子供の田中に返ってきたのは、憐憫と忌避の視線。

そして田中は、いつしか声を上げるのをやめていた……。

「くっそ……どうしようもなくて、ただダラダラと寿命で死んじま
った……。

なのはちゃんも、フエイトちゃんも、はやてちゃんにも関わ
れなかった……。

管理外世界、しかも地球じゃなくて、どうやって関わられてんだ
よお」

「あうあう……」

「管理局と関わる機会もねーし、魔力があるったって魔導師ランク以下だから、世界間移動なんて出来ねーしよお……くそっ」

両手で顔を覆い、絶望したとばかりに溜息を吐く田中。

そんな彼を見て、少女　神は暫くオロオロした後、何かを決めたのか両手を胸の前で握り締め、小さな声で「よしっ！」と気合を入れる。

「安心してください田中さんっ！」

「……ああ？」

「貴方が死んでしまったのは私の責任ですっ！　だから、ちゃんと私が責任持つて、貴方が満足できる転生をするまで何度でもお付き合いますから！」

「……いいよもう、だってお前、大したこと出来ないじゃん」

「はいっ！　ですけど、条件を上手く付け替えていけば、きっと上手いく時があると思っんです！」

ですから、諦めないで頑張りましょうっ！　田中さんっ！」

少女の励ましを聞いた田中の目に、少しずつだが希望の光が戻ってくる。

そして

「ああ！頼むぞ神様！」

「はいですっ！この私にお任せくださいですっ！」

2人は手を取り合い、そう言って笑いあったのだった。

「それじゃあまずは、世界と時期、生まれる場所を指定した上での付加能力は……」

「それはですね……」

この後2人は様々な条件の組み合わせを試し、時に田中が妥協して『理想の転生』を目指して頑張っていく。果たしてそれが報われるかどうかはともかく、それはある意味充実した『人生』だったのかも知れない……。

めでたしめでたし。

そう。めでたしめでたしで終われたなら、どんなに良かったらうか。

しかし現実はそのほど甘くない。

確かに田中と神は様々な条件を試し、お互いに協力して『理想の転生』を試していた。

だが、人の精神は神と同じ時間を過ごすようには出来ていない。

「……なあ」

「ごめんなさいっ！ ごめんなさいっ！」

何度目……いや、何百、何千度目になるか分からない少女の顔を見ながら、田中はげっそりとした表情で声をかけた。

既に初めて田中が転生をしてから数千年の時が流れている。

それだけの時間をかけても、未だに田中の『理想の転生』は為せていない。

……まあ、実際のところ、その表現は正しくないのだが。

「もういいよ。いい加減やめよう」

見た目は10代後半のまま　しかし、その仕草や口調に老人の様子を垣間見せながら、田中は少女に向かって手を振った。

「もういいんだ。何度も転生したお陰で、俺は十分に生きた。そして、君のお陰もあって、俺は何度もなのは達と幸せな結末を迎えることも出来た。……それだけでもう、十分なんだ」

そう。

田中は何度も転生する中で、『リリカルなのは』の主人公達をそれぞれ妻に娶り、そのまま寿命を迎えるという結末を何度か迎えている。もちろん、彼が大昔に望んだ“ハーレム”ではないが、それでも今の田中にとって、それは十分すぎる結末なのだ。

「昔の俺が馬鹿だったんだ。身の丈に合わない願いだけを口にして、浮かれすぎていた。」

君にも随分と迷惑をかけてしまった。悪いと思っているし、感謝もしている。

だから、もう「

駄目ですよっ！」

微笑む田中の言葉を遮り、神はそう言った。

「……え？」

「私は田中さんと、『理想の転生をさせる』って約束しました！
ですから、それが叶えられるまでは “絶対に” 諦めませ
んよっ！」

田中さんもそんな弱気な事言わないでくださいっ！ 次は絶対、
絶対に成功しますから！」

「いや、だから俺はもう」

「だって田中さんは私のせいで死んでしまっただんですものっ！ だ
から、ちゃんと最後まで責任を負わせてください！ 私は、田中さ
んが『理想の転生』が出来るまでお付き合いしますからっ！」

「だから、俺は」

「さあ、次はどんな条件にしましょう!？」

世界と時期、場所、両親、友達、経済状況とかの条件は、ここ2
00回の転生では変えてませんから今回も変えなくていいとして…

…

「だから俺はもう満足したから！ だからもう、死なせてくれっ！
」

田中の切実な叫び。

人間の精神は、永遠の時を過ごすようには出来ていない。

むしろ、数千年という時間を過ごせた田中の精神を誉めるべきだ
ろっ。

それでも、限界は訪れる。今の田中が、まさにそうなのだ。

だから、田中は死にたかった。

満足のいく人生を何度も送って、どこか抜けている神様とも友人になって。

そんな幸せの中で、彼は死にたかったのだ。

けれど。

「……？ ああ！ やだなあ 田中さん」

けれど。

「私にそんなに気を遣わないでいいんですよ！」

「は？」

彼の切実な叫びに対して、神はそんな筋違いな答えを投げ返してきた。

「田中さん優しいから、私が神様のお仕事に専念できるように、そんな事を言ってくれたんでしょ？」

「だーいじょうぶですよ！ 田中さんの転生のお手伝いをしながらでも、ちゃんとお仕事はこなしていますから！ だから、私に気を遣ってそんな事を言わなくてもいいですから！」

「ちがつ……俺は！」

「大丈夫です！ ちゃんと『理想の転生』が出来るまで、絶対に田中さんは死なせません！」

「どーんと、大船にのったつもりでいてくださいねっ！」

「違う……違うんだ、俺は……俺はもう、死にたいんだ！」

田中はそう叫んで神に縋りつく。

けれど、神は「やだな」と苦笑するばかりで、彼の叫びを聞き届けたりはしない。

「気を遣わなくていいですから、次の条件を考えましょ？」

「ここ数百年で私の力も増してきましたから、前よりも少しはいい条件も選べるようになったんです！」

だから

「どこまでも純粹に、どこまでも優しく、どこまでも善意だけの笑みを浮かべながら。」

どこまでも残酷で、どこまでも恐ろしい言葉を、少女の姿をした神が告げる。

「 『理想の転生』 が出来るまで、いつまでも一緒に頑張りましようね。」

「 ねっ！ 田中さんっ 」

なにより、この神が最悪なのは　その行動に悪意が欠片も無いという事。

一片の曇りも無い純粹な善意だけで、この神は行動する。無知な頭で考えた“善意の塊”を、相手に向かって“押し付ける”。

孤独を紛らわせる為に、少しでも役に立とうと“善意”だけで動くのだ。

善意しかないから、物事をポジティブにしか解釈出来ない。

無知だから、相手が本当に拒んでいると察せない。

孤独だったから、無意識に相手を繋ぎとめようとしてしまう。

こうして、最悪神と呼ばれる『エイラ』エイラ』と、その神に囚われた『田中 太郎』の、調子つ外れな物語のワルツは永遠に続いていく。

くるくると　。

クルクルと　。

狂　狂　と　。

(後書き)

前々から書きたいと思っていた設定を、手の動くままに書いてみました。

初めましての方、初めまして。

どうも、ラモンです。

テンプレ展開だと、神様っていくつでも能力をくれますが、その神様の能力そのものに許容量があつたら？

前々から妄想していた展開を、そのまま文章にしてみました。

ちよつと詰め込みすぎてまとめ切れなかった感がありますが、どうだったでしょうか？

この作品のテーマは『善意の怖さ』です。

善意って、一歩間違えば悪意になると私は思うんですね。

ほら、構って欲しくない時に、元気付けようと一生懸命話しかけてくる友達が、凄くうざったく感じたりすることってありません？

もしくはその逆で、一生懸命話しかけてたら「ウザい！」って言われるとか。

エイラ＝エイラのしている事は、その酷い版を想像しています。

この話で一番難しかったのは、実は田中太郎だったりします。

最初は典型的な駄目人間だった彼が、数千年という時を経て真人間……というより、悟った人間になった感じを、言葉だけでどう表現するか。

これが意外と悩みました。

エイラ＝エイラはずっと変わらず、善意だけで田中の為に行動しています。

最後の方も嫌味みたいに見えますが、彼女に悪意は欠片もありません。

だからこそ、余計に残酷なんですけどね。

そんな感じを少しでも出せていたなら、成功かなーと思いますです。

ではでは、また短編を書く機会がありましたら、その時に。

感想やご意見をいただけると、とても嬉しいです。

短編は書き慣れてないので、直した方がいい部分などがあればドンドンお願いします。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4444t/>

例えば、こんな転生があったらどうだろうか？

2011年10月6日11時27分発行